

【資料】

清沢満之研究班の活動と成果

——『清沢満之全集』別巻編纂に関する調査報告——

西本 祐 攝
大 艸 啓

一、はじめに——『清沢満之全集』別巻刊行の経緯——

大谷大学真宗総合研究所の清沢満之研究では、大谷大学の初代学監である清沢満之（一八六三—一九〇三年）の生涯と思想の研究を目的とし、また学内外を問わず清沢満之研究に資することを目的とし、二〇一八年度から二〇二〇年度にかけての三年間の研究活動において、『清沢満之全集』別巻Ⅰ・Ⅱ（岩波書店、二〇二〇—一、以下『全集』別巻と略）の編集刊行に取り組んだ。

この研究活動の背景としては、一九九一年度に真宗総合研究所内に清沢満之研究が発足し、一九九三年度に大谷大学における清沢満之の『全集』編纂に向けた研究活動が開始され、清沢満之没後一〇〇周年を機に大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店、二〇〇二—三、以下『全集』と略）の刊行が成し遂げられたことを挙げねばならない。さらには、『全集』に収録できなかった清沢満之著述群について、『全集』刊行期間中、および刊行後も、調査・収集・翻刻・校正を断続的に行ってきた。二〇一四年度からはそれらを収録した『全集』別巻刊行に向けた研究活動を本格的に開始し、『全集』

未収録文献の収集、翻刻、精査、校正の活動を行った。

これらの研究活動により、『全集』掲載基準を満たすと考えられる清沢による大学寮での講義録、自筆書簡、清沢著述の清沢自身による英訳文献、雑誌等に掲載された論稿等を確認するに至った。これらの文献について、二〇一六年度末までに行った調査については、藤原正寿・西本祐攝「大谷大学編『清沢満之全集』未収録文献について」（『真宗総合研究所研究紀要』第三五号、二〇一八年三月発行、以下「調査報告」と略）に報告済みである。

これらの研究活動を背景とし、二〇一八年度からの本研究班の活動は開始された。二〇一八年四月二五日に開催した第一回の全体会議において、別巻に収録する文献は研究活動開始までに確認し得た文献を掲載して刊行するという基本方針を研究員間で共有した。研究員間でこの基本方針を決定した理由としては、編集刊行中に新たな文献情報が随時寄せられることが十分に予想されたこと、さらにはそれらについて不十分な確認のまま掲載に至ることは、本『全集』及び『全集』別巻の性格上、避けられるべきであると判断したためである。

二〇一八年七月二五日に開催した研究班の全体会議では、二〇一六年度までの研究活動で行なった収集文献の内容検討を踏まえて、別巻の構成案を決定した。収集済みの文献は『全集』の体裁（一頁あたり、一行五二字×一七行）に換算して二巻分の分量であった。『全集』全九巻は各巻をテーマ別に分類した上で各巻ごとの名称を付したが、別巻は収録する文献の内容から、テーマ別にまとめて巻ごとに名称を付すことはせず、二巻を通した構成とし、講義・執筆年代と内容を踏まえた上で、適切な頁数で区切る案に決定した。

別巻の「編集方針」は、『全集』の方針を踏襲することを確認した。特に、掲載文献は原則として清沢自身の著述に限ること、本文の文字表記については依拠本に忠実であること、編者による仮題や注記は「」などを用いて明示すること等である。「編集方針」について明文化しうることについては「凡例」に明示している。また『全集』に倣い、解題は、依拠本の書誌情報等、極めて限定した内容にとどめている。これは編集する我々が恣意的にテキストを構成したり、特定

の個人の研究内容を反映するような注、解題を作成したりすることのないように留意するという編集方針によるものである。

以降、編集作業に専念し、出版社（岩波書店）へ入稿する原稿の作成を進めた。作業は、研究員と研究補助者（五名）で進め、本文内容の確認、注項目の抽出等を中心とした読み合わせ作業とその作業で浮かび上がった編集上の問題点や本文の文字表記の確認、文献ごと、特に講義録における章節などの目次の確認、注内容の確認作業などを継続的に行った。

具体的に編集を担当したのは、研究員の一栗真、大艸啓、加来雄之、西尾浩二、西本祐攝、福島栄寿、藤原正寿、囑託研究員の川口淳、浦井聡、名畑直日児、研究補助員の藤井了興、澤崎瑞央である。これらの編集担当者が構成案の検討、読み合わせによる本文の確認と注の作成を行った。また、研究補助者によって翻刻校正作業を行った。さらには別巻Ⅰ・Ⅱを通した解説を西洋哲学・日本思想史の研究者である藤田正勝氏（京都大学名誉教授）が執筆した。加えて出版社である岩波書店においても、校正者による校正・確認作業を行った。

別巻Ⅰを二〇二〇年三月二七日に、別巻Ⅱを二〇二二年三月二六日に岩波書店から刊行し、三カ年の活動を終わらせている。

さて、上記のとおり、本研究では別巻Ⅰ・Ⅱの刊行を果たすことができたわけであるが、当初、収録予定としていた文献で収録を見送ったもの、編集中に新たに寄せられた清沢著述文献の情報等、編集作業と並行して確認した事柄がある。以下、それらについて報告することで、清沢著述文献についての情報共有をはかり、今後の清沢満之研究の課題として明示しておきたい。

二、収録文献と未収録文献

別巻は、別巻Ⅰ・Ⅱの二巻組で、『全集』全九巻と同様の製本で刊行した。各巻の目次は次の通りである。

【別巻Ⅰ】

口絵

凡例

哲学史講義

I. 古代哲学史

II. 中古哲学史

III. 近世哲学史

注

解題

【別巻Ⅱ】

口絵

凡例

I. 論理学講義

II. 心理学講義

III. 哲学史

IV. 近代史

V. 今世哲学史

VI. 刊行物掲載論文（七篇）

Ⅶ. 書簡補遺（一八通）

Ⅷ [The Skeleton of a Philosophy of Religion. (草稿)]

注

解題

解説（藤田正勝）

二〇一六年度までの活動において、『全集』刊行後に新たに確認した清沢満之関連の文献を収集・翻刻してきたわけであるが、二〇一六年度末までの調査について、上記「調査報告」では、三八点の新出文献を確認したこと、その中で別巻への掲載基準を満たすものとして三三点を確認したことを報告していた。しかし、二〇一八年度からの本研究班の活動において、別巻の編集作業を本格化し、読み合わせ作業を行い、それらを精査していく中で、収録の可否についていくつかの変更すべき点があることを確認した。

まず、三三点の中にはあげていなかったが、新たに別巻Ⅱへ収録することになったものとして、刊行物掲載論文三点と書簡一点がある。これは、上記「調査報告」から二〇一八年度の研究班発足までの間に確認できたものであったことから、収録文献として追加したものである。具体的には、①「開化ト真理」（別巻Ⅱの刊行物掲載論文に所収）、②「無上大法」（同上）、③「世界の歩み（二）」（同上）、④上宮寺所蔵の明治三十六年四月二十三日付浩々洞宛書簡（別巻Ⅱの書簡補遺に所収）の四点である。

ただその一方で、上記三三点中には、口述者が不明確な講義録二点（「調査報告」二八―三三頁、別表ⅠのNo.9『倫理学史』とNo.10『近世倫理学史』）、さらに、清沢の自筆ではあるが、所蔵元が不確かな文献一点（同上）No.32年不明三月十一日付清川円誠宛書簡）が混在していることも、編集作業を進めていく中で判明した。前者二点は、真宗大学寮におけ

る講義の筆録であり、その筆録者である関根仁応の自坊長徳寺に、他の清沢の真宗大学寮における講義録「哲学史」「近代史」「今世哲学史」（いずれも別巻Ⅱに所収）と一括された形で蔵されていたことから、それらと同様に清沢の口述として判断し、収集していたものである（藤原正寿「長徳寺蔵清沢満之関連資料の調査報告」『真宗総合研究所所報』第六八号、二二頁参照）。しかし、この二点には口述者に関する記載がないことを編集を進める中で確認し、清沢口述のものかの精査が不十分であると判断した。このため、当時の真宗大学寮での科目担当者を調査したところ、「倫理学史」に関する科目の担当は柳祐信であることが判明した（後述）。また、No.32の書簡一点は、二〇〇四年三月の段階ですでに翻刻済みの文献であり、長年、当班で影印版を所持していたものの、原本の所在に関する情報が不明となっていた。そこで、当時の研究員、研究補助員にも確認をとり、あらためて調査をしておしたが、所蔵元を確認することができなかった。このため、研究員間で慎重に協議した結果、先の二点と合わせて、最終的に別巻への収録を見送ることとした。

また、先の『全集』出版に際してもそうであったが、編集作業中に清沢に関する新出文献情報が寄せられることが想定された。本研究では、すでに述べたとおり、二〇一八年度研究班発足時に文献内容の確認を済ませたものを、別巻収録の条件として優先することとしていた。実際、想定したとおり、この編集刊行期間中に新たな文献情報が複数寄せられてきた。これらについては新出文献であるか否か、掲載基準を満たすかどうかなどの十分な調査を踏まえる必要がある、上記の方針に従うことを研究員間で確認し、それらを別巻に収録することは見送っている。

これらのほか、種々の事情により、別巻には収録しなかったが、重要と思われる文献もいくつか確認している。上記「調査報告」でも述べているように、清沢の大学時代のノート類など、清沢著述とはいえないために掲載基準は満たさないものの、清沢の思想に密接に係る清沢の自筆文献が西方寺に所蔵されている。また、同じく上記「調査報告」で述べたように、先の『全集』に収録した文献には、既刊の『全集』（無我山房『清沢全集』全三巻、有光社『清沢満之全集』全六巻、法藏館『清沢満之全集』全八巻）や刊行物に掲載された文献を依拠本としたものが複数あったが、その原本、あ

るいはそれに近い別の刊行物など、その後の調査・研究で確認しているものもある。清沢著述のものとしてはすでに知られているが、新出文献とはいえないため、別巻にて再度収録することはしなかった。また、上記「調査報告」で言及した法讃寺所蔵資料については、提供された写真データをもとに、研究活動を再開できた二〇一八年度から翻刻を行った。翻刻作業において、写真データからは文献に記された内容を十全に把握することが困難な資料状況であることが明らかとなった。十分な確認が行えない文献を収録することは避けられるべきである²と判断した上で、掲載を見送っている。

本報告では、二〇一八年度以降に新たに寄せられた文献群の中で、刊行物に掲載された清沢著述の文献についてその書誌情報を報告しておきたい。以下の六点である。

①「宗教と哲学との関係」記名「文学士 徳永満之」『浄土教報』第十二号（明治二二年七月二五日発行）『同前』第十三号（明治二二年八月一〇日発行）

②「楽土論」記名「文学士 徳永満之」『真仏教軍』第二号（明治二五年一月一日発行）

③「我無我を論ず」記名「文学士 徳永満之」『真仏教軍』第五号（明治二五年七月二五日発行）

*『全集』第一巻・三四四頁一六（『靈魂』が雑誌に掲載されたもの）。

④「宗教論」記名「徳永満之述」『真仏教軍』第一号（明治二六年二月二五日発行）

⑤「一念三千」記名「文学士 徳永満之」『明教新誌』第三三三八号（明治二六年五月一六日発行）

⑥佐藤信治宛「書簡」『精神界』第四卷第六号（明治二七年六月一〇日発行）

①⑤は、川口淳氏（現、同朋大学仏教文化研究所員、当時、本研究嘱託研究員）に、②④は、中西直樹氏（龍谷大学教授）に、⑥は、名畑直日児氏（真宗大谷派教学研究員、本研究嘱託研究員）より提供された文献である。これらは、すでに活字化され仏教雑誌に公開されている文献である²。

以上、今回刊行した別巻へ掲載するには至らなかった文献についても、清沢研究への寄与が期待される文献として重要

なものも少なからずある。このため、今後もそれらの調査・研究を継続して進め、本誌等でその成果を報告していきたい。(以上、西本)

二、講義録の口述者をめぐらる問題

先の「調査報告」において、別巻への掲載基準を満たすものとして『倫理学史』と『近世倫理学史』をあげていた。これらは、筆録者である関根仁応の自坊長徳寺に、他の清沢口述の講義録などと一括された形で蔵されていたことから、それらと同様に清沢の口述と判断してきたものである。しかし、この二点には口述者に関する記載がなく、清沢口述のものかどうかも未精査であった。これらの確認作業が不十分なまま清沢口述のものとしていたことは、重大な反省点であり、今後のためにも特記しておきたい。

講義録の口述者について確認する場合は、当時の大学寮のカリキュラムや科目担当者进行调查し、あわせて、筆録者の在学年度も確認する必要がある。そこでまず、別巻に収録した住田智見と関根(草間)仁応³の講義録に記載された情報を表1にまとめておく。

表1 別巻収録の講義録の記載

筆録者	講義録	筆記年	記名
住田	論理学講義	明治二一年一〇月二三日 同二二年四月二七日	「於真宗大学寮専門別科 住田知見記」 「文学士 徳永氏述」
住田	心理学講義	明治二二年五月一四日 七月頃	「専門別科第三年住田知見 記」 「京都尋常中学校長 文学士述」

住田	古代哲学史	明治二二年一〇月一日 ～同二三年六月二七日	「愛知県 住田智見」「文学士 徳永満之氏述」「住田智見記」
住田	中古哲学史	明治二三年九月二〇日 ～同二四年一月二七日	「文学士 徳永満之述」「本科第二年度 住田智見録」
住田	近世哲学史	明治二四年二月上旬 ～同二五年六月二九日	「住田智見 録」「文学士 徳永満之口授」
関根	哲学史	不明(明治二四年～同二五年?)	「徳永満之文学士述」
関根	近代史	不明(明治二五年～同二六年?)	「徳永師」
関根	今世哲学史	明治二六年～同二七年	「徳永師」

これらはいずれも、真宗大学寮で清沢が口述したことが明記されている。詳しくは後述するが、清沢が担当したのは専門部の哲学系科目であり、就任当初は本科と別科の科目を担当した。しかもこの時期は、ちょうど専門部に本科と別科が分置された頃にあたり、住田智見は明治二十二年に始業した本科の第一期生になる。

すでに『全集』第一巻には、上杉文秀筆録の『宗教哲学骸骨講義』(明治二十五年九月七日～同二十六年三月)を収録している。また第五巻には、岡本覚亮筆録本と上杉文秀筆録本による『西洋哲学史講義』を収録しており、岡本のそれは明治二十二年十月～二十五年六月、上杉のそれは明治二十三年九月～同二十六年六月のものである。別巻Iに収録した「古代哲学史」、「中古哲学史」、「近世哲学史」は、岡本のそれと同時期であり、上杉は翌年、関根はさらにその翌年ということになる。これらの受講年は、彼らの大学寮専門別科・本科での修学年を『本山報告』や『本山事務報告』で調べると、確かに一致している。⁶

このように清沢は、真宗大学寮にて明治二十一年から同二十七年(年度は二十六年度)まで講師を務めていたことが分

かる。大学寮の専門部では、宗乗・余乗を中心としたカリキュラムが設けられ、他に哲学や漢学などもあった。別巻に収録した講義録は、いずれも専門部における哲学系の科目である。このカリキュラムにも若干の推移があり、それを表2に示すと、次のようである。

表2 真宗大学寮専門部のカリキュラムの推移（哲学系のみ）

		別科二年	毎週時間	別科三年	毎週時間	本科一年	毎週時間	本科二年	毎週時間	本科三年	毎週時間	
明治二年二月				論理 心理	4	哲学史 社会哲学 支那哲学	9	純正哲学 倫理哲学 支那哲学	9	宗教哲学 印度哲学	9	『本山報告』三三号附録
明治三年七月改正		論理	1	論理 心理	3	哲学史 社会哲学 支那哲学	9	哲学史 倫理哲学 支那哲学	9	哲学史 宗教哲学 印度哲学	9	『本山報告』六一号附録
明治四年八月改正		論理	2	心理	3							『本山報告』七四号
明治五年九月改正								印度哲学を削除				『本山報告』八七号
明治二六年八月改正	論理	2	心理	3	哲学史 社会学	4	同倫理学	4	同宗教哲学	4		『本山報告』九八号

当時のカリキュラムは、専門本科の第一年から第三年までを通じて、「哲学史」という科目を履修することになっていた。住田筆録の「古代哲学史」「中古哲学史」「近世哲学史」、および関根筆録の「哲学史」「近代史」「今世哲学史」が、それぞれの本科一年次、二年次、三年次でのものに当たることは明らかである。

そして、清沢口述としていた『倫理学史』と『近世倫理学史』であるが、前者の表紙には「History of Moral Science」

の外題があり、内題は「倫理学史」、その下方に「明治廿六年一月十一日午前十時半ヨリ」の記載がある。一方、後者の表紙には、「History of Moral Science」の外題があり、「近世倫理学史」の内題、および末尾に「倫理学史畢／明治廿六年／倫理学終」の記載がある。この二点は、いずれも明治二十六年に口述されていること、ともに英文の外題が一致し、内題や尾題に「倫理学史」「倫理学」などあることより、二冊で一つのまとまりといえる。このため、同一科目の口述内容を筆録したものと推定される。それは、当時のカリキュラムで本科第二学年に開講されていた「倫理学」に相当するものと見てよい。そして『本山報告』八七号と『本山事務報告』二号によると、明治二十五年度と二十六年度は柳祐信が担当していた科目であることが判明する。

ところで、『本山報告』四〇・五一・八四・八七・九六号、および『本山事務報告』二号には、明治二十一年から二十六年頃までの大学寮での科目担当者が記されており、そこに「徳永満之」の名も見える。これまで、清沢が大学寮で教授を務めた間に何の科目を担当していたのかは、必ずしも十分に知られていなかったわけではなかったので、貴重な記事である。ただ、専門本科・別科の科目担当者が分かるのは毎年ではなく、担当学年などの記載の有無もまちまちである。また、カリキュラム上のすべての科目の担当者名が確認できるわけでもないため、実際に開講されていなかった可能性がある科目も想定しなければならず、その全貌はつかみにくい。しかし、これら担当者の記事と上記四名の筆録本の情報、およびカリキュラムの推移を照らし合わせると、明治二十一～二十六年度の哲学系の開講科目と担当者は、表3のように復元することができる。⁷

表3 明治二一～二六年度の哲学系開講科目（復元）

明治二六年度	論理	心理〔柳〕	哲学史〔柳〕 社会学〔柳〕	哲学史〔沢柳〕 倫理学〔柳〕	哲学史〔徳永〕 宗教哲学〔徳永〕	本科三年に関根	別科一年	別科二年	別科三年	本科一年	本科二年	本科三年	備考
明治二五年度	論理〔柳〕	心理〔柳〕	哲学史〔柳〕 社会学〔柳〕 支那哲学	哲学史〔徳永〕 倫理学	哲学史〔徳永〕 宗教哲学〔史〕〔徳永〕 印度哲学 〔教育哲学史〕〔柳〕	本科三年に上杉 本科一年に関根	別科二年	別科二年	別科二年	本科二年	本科二年	本科三年	備考
明治二四年度	論理〔柳〕	心理〔柳〕	哲学史〔徳永〕 社会学〔柳〕 支那哲学	哲学史〔徳永〕 倫理学	哲学史〔徳永〕 宗教哲学〔史〕〔徳永〕 印度哲学 〔教育哲学史〕〔柳〕	本科三年に住田・岡本 本科二年に上杉 本科一年に関根	別科二年	別科二年	別科二年	本科二年	本科二年	本科三年	備考
明治三三年度	論理	心理 論理	哲学史〔徳永〕 社会学 支那哲学	哲学史〔徳永〕 倫理学	哲学史〔徳永〕 宗教哲学〔史〕〔徳永〕 印度哲学 〔教育哲学史〕〔柳〕	本科二年に住田・岡本 本科一年に上杉 別科三年に関根	別科二年	別科二年	別科二年	本科二年	本科二年	本科三年	備考
明治二二年度	論理〔学〕〔柳〕	心理 論理〔柳〕	哲学史〔徳永〕 社会学〔柳〕 支那哲学	哲学史〔柳〕	哲学史〔徳永〕 宗教哲学〔史〕〔徳永〕 印度哲学 〔教育哲学史〕〔柳〕	本科一年に住田・岡本 別科二年に上杉 別科一年に関根	別科二年	別科二年	別科二年	本科二年	本科二年	本科三年	備考
明治二二年度		心理 論理〔徳永〕 心理〔徳永*〕				別科一年に上杉 別科一年に関根*2	別科二年	別科二年	別科二年	本科二年	本科二年	本科三年	備考

※注1 明治二十二年度に柳が補講か（本文参照）
注2 関根は明治二十二年一月頃に別科入学か（関根仁応日誌）第八巻の名畑氏による解説を参照）

四、真宗大学寮のカリキュラムと清沢満之

明治二十年に東京大学を卒業した清沢は、明治二十一年に本山の要請により京都へ赴任し、七月に京都府尋常中学校長に任じられ、同時に大学寮で科目を受け持つことになった。『本山報告』四〇号によると、「京都尋常中学校長徳永満之へ心理」を委嘱したとあり、清沢が最初に大学寮で担当したのは専門別科三年対象の「心理」であった。ただ、明治二十一年のカリキュラムによると、当該学年の哲学系科目に「論理／心理」とあるが、配当時間は切り分けられておらず、おそらく一つの科目として設定されていたのであろう。当該年度に別科第三学年であった住田智見が「論理学講義」と「心理学講義」を筆録していることから、同一科目であっても実際には内容を論理学と心理学とに切り分けて講義を行ったようである。ただ、別巻Ⅱの解題および解説でも触れているように、住田筆録の「心理学講義」は、途中で柳祐信に口述者が変わっている。すなわち、墨付き第一六丁裏に、「明治廿二年九月廿一日補講／文科大学卒業生 柳祐信氏述」とあり、末尾には「明治二十二年己丑十有二月十四日満席」とあるのである。清沢が講じた心理学の補講を柳が担当したというのは、どういうことであろうか。

当時の大学寮の年度替わりは、七、九月の夏季休暇前後が境目であった。住田は、別科第三年であった明治二十一年九月より清沢の「論理／心理」を受講したが、論理学の内容が二十二年四月二十七日まで続いたため、心理学の内容は五月十四日から六月末までの短期間だけであった。おそらく清沢は、受持した「論理／心理」において、論理学と心理学の内容を一ヶ年度内にすべて口述できておらず、論理学に時間を割いて心理学に関してはほんの一部しか講義できなかったであろう。そして、住田が七月に本科第一学年に進級したのち、九月より十二月まで同科目の補講を柳が行ったということになる。ただ、明治二十二年度の科目で別科三年対象に「論理、心理 柳祐信」とはあるが、本科一年対象科目に心理学ないしそれに相当する科目は見当たらない。このため、別科三年の科目を前年度の補講にも兼ねたのか、別科三年

の科目とは別に補講を設けたのかは、残念ながら不明である。

ここで注意を引くのは、明治二十三年度の別科カリキュラム改正により、哲学の科目として第二年に「論理」、第三年に「論理／心理」となり、論理学の時間が第二年も配当されていることである。おそらく、論理学と心理学両方の内容を十分講じることができるようにするためであろう。さらに、明治二十四年度の別科カリキュラム改正では、哲学の科目は第二年に「論理」、第三年に「心理」と明確に切り分けられ、「論理」の方はさらに時間数が増えている。このように、口述内容が偏ってしまったという上記のような経緯を踏まえて少しずつ改正されていることが分かる。

これらのほか、本科の哲学系科目では、「哲学史」が第一年から第三年までを通して設定されているが、当初はそうではなかった。明治二十一年二月時点では、第一年に「哲学史」、第二年に「純正哲学」、第三年に「宗教哲学」であった。これが明治二十三年度には、哲学史を三年間通じて学習することになり、「純正哲学」は削除されたのである。当初設定された「純正哲学」は、井上円了が創設した哲学館に清沢が参加し、そこで同名科目を講義した経験¹¹と関係があるとみられる。

また、哲学系科目としては、支那哲学と印度哲学もカリキュラム上に位置づけられているが、誰かが担当した形跡はなく、実際には開講されていなかったと思われる。そのためであろう、明治二十六年八月に改正された科目表にこれらは見えず、削除されている。

これらの改正には、当然ながら清沢や柳らの意向が関与していたと思われる。彼らは、哲学を研究するうえで何が重要であるかを確認し、修学のための科目や開講時間数などについて、話し合っただけで決めていたはずである。住田筆録の「心理学」の途中で清沢から柳へ口述者が変わっているのは、単なる交代ではなく、科目の時間数や学年配当が十分整備されていなかった様子を示しているといえる。このように、現存する講義録によってカリキュラムが少しずつ整えられていく経緯を読み取ることが可能である。

当時の宗門学制はめまぐるしく変動していたが、とくに大学寮のカリキュラムについては、科目担当者たちが積極的に関与していたようである。明治二十九年には真宗高倉大学寮と真宗大学とが分離¹²するなど、清沢らの学制改革運動によって大きく変化していく。このような宗門学事の変遷は、この時の組織改革や白川党の設立がその起点として注目されがちであるが、それ以前の大学寮時代からその胎動があり、カリキュラム改編などの積極的な関与がその後の運動にも繋がっていったと見ることも十分可能である。後の運動に関わった者のなかに、大学寮時代の科目担当者が大勢いることは、まさにそのことを傍証しているであろう。

そこで次に、大学寮を通じての清沢らの交流を中心に、学制改革運動の起点となる前後の動向を見ておきたい。

五、学制改革運動の胎動

関根仁応が大学寮別科に在学中であった明治二十二年九月、彼の日誌には、次のような興味深い記載がある（後略）¹³
 （中略）は引用者注。

去ル六日柳祐信氏ヲ訪フ 一時間程談話シテ帰ル（後略）

柳氏曰ク（予ノ問ニ答テ） 哲学ハ洋書ニ付カサルモ大抵学ヒ得ヘシ…… 併シ確カリ学フニハ洋書ヲミネハナラヌコト…… 拉典独等ノ語ハ格別ノ必要モナシ 何トナレハ大抵皆英書ヲ読メハ其中ニ拉典モ何モ充分ニ翻訳シアレハナリ 故ニ英書サヘヨク読メタナラ独乙拉典等ハ余リ知ラネハナラヌ必要モナシ 特ニ現今大学校ニ拉典語ヲ課目ニ入レテアレトモ西洋人中ニモ充分ニ是ヲ教ルモノハナキ程ナリ（中略） 英書ハマコーレーノエッセー位ハ読ダノカ…… 文法書ハ何ヲ読タカ…… 文法カ文法ハ先ツフリーズ（タシカコウ云ハレタ様ナレトモヨク解セサリギ）ガ出来ルナラハヨカラシ…… ウン先ヅ論理ガ入用デアル……

関根が別科二年の時であるから、柳担当の論理学を受講しはじめる直前頃であろう。関根の質問内容は不明であるが、

文脈から推すと、おそらく哲学系科目を受講するうえでどのような語学の学習が必要かということであったようである。それに対する回答もさることながら、これから受講することになる論理学の重要性を論じているのは興味深い。カリキュラム上で真っ先に受講する哲学系科目が論理学であるので、その説明をしたのかもしれない。いずれにしても、大学寮の学生と教授との交流を示す重要な一齣であり、後に学制改革運動に加わるこの二人の交流は、この頃にはじまったといえるであろう。¹⁴

学制改革運動といえば、明治二十六年に本科二年の哲学史を沢柳政太郎が担当していることも興味深い。当時は宗門内において、清沢を中心に学制改革運動が始まる時期に当たり、正確には、明治二十五年（一八九二）十月に清沢が稲葉昌丸・井上豊忠らとともに本山執事の渥美契縁に財政整理と教学振興を献策したことに始まる。¹⁵そして翌二十六年九月には、清沢の一年後輩にあたる沢柳を招聘し、大谷尋常中学校校長と宗門内の学部顧問に就けているのである。これと同じ時に大学寮の哲学史を担当したということは、当然清沢の打診によるものであろう。清沢が大学寮で教鞭をとった時期は、ちょうど改革運動の起点となる重要な時期に当たるのであり、彼を中心とした科目担当者が多く改革運動に参加していることは、ここでの授業や交流がその運動に大きな影響を与えていることを明示している。このように、大学寮を通じた清沢と他の科目担当者らとの関係についても、宗門の学事史を明らかにするうえで一考の余地があると考えられる。

ところで、清沢は明治二十七年四月二〇日、肺結核の診断を受け、その後教職を辞し、六月から垂水での療養生活に入る。ちょうどそれは、別巻Ⅱ収録の『今世哲学史』が冒頭に「未結」とあり、シュライエルマツハーの途中で終わっていることから、この講義途中での辞任であったことが分かる。

清沢の受持科目は、初年度を除くと、本科第一～三年の哲学史および第三年の宗教哲学であるが、前者のすべての学年を受け持ったのは明治二十四年度だけで、二十五年度は二年と三年、二十六年は三年のみの担当である。学生からすれば、二十二～二十四年の本科入学生が三箇年いずれも清沢の講義を受けたことになる。これを一見すると、少なくとも哲

学史の担当は二十六年度末を最後に退くつもりであったように思われるのである。

これに関して注意を引くのは、明治二十六年三月二十五日付の両親ほか宛書簡に、次のように記していることである。兼而御話申上置候辞職旅行之儀、本月二日渥美執事へ申出候処殊の外恐愕に有之候。併し当日北国行之都合にて緩々たる談話も無之其の儘に相成居候。申出候節は三月限りにて辞職と申置候処、其の儀丈は差延、兎も角来る七月迄、是非在京と致居候様、他へ申残しにて其の人より熟談有之、小生も必ずしも本月限りと云ふの必要も無之故、先づ其の意に任せ居候。併し七月にはドーあつても出立の事に決定致居候。¹⁶

西村見暁氏によると、「三人とも職をしりぞいて全国を行脚し、私立学校を設立しようということに決心せられた」といい、上記のように教学刷新を企図した清沢は、稲葉・井上とともに辞職するつもりであったというのである。さらに井上豊忠は、明治二十五年二月七日に大学寮の授業時間の打ち合わせのために太田祐慶宅を訪ねた際、清沢と初対面した時のことを回想しており、「此時先師（清沢）は猛烈な制慾によつて修養をやつて居らる、最中で已に京都尋常中学校長を辞し、將に教職をも辞して専ら声聞主義の修行に全力を注がうとして其準備中であ」つたという。¹⁸

確かに清沢は、明治二十三年頃より禁欲戒の生活を実践しており、その頃に京都府尋常中学校の校長職を辞している。中学校と大学寮での授業は継続したようであるが、二十六年三月には中学校が宗門より京都府へ返還されており、先の手紙には「先づ一方丈は手明きに相成都合宜敷御座候」とあるのである。

このように清沢は、結核を患う前々年から辞職の意思を持っていたことが分かる。井上豊忠の回想によれば、それは禁欲生活の一環として退くつもりであったように思われるが、どうも宗政を担う本山上層部（とくに執事の渥美契縁）に対する不満が募つての意向であつたらしい。¹⁹ 実際には、種々の経緯により三名とも留任することになつたようで、結局は二十七年頃の結核罹患が辞職の直接的な契機となつた。しかし、それ以前に辞意があつたことは、授業と修道生活を両立することが難しかったという事情もあるかもしれないが、学制改革運動へ発展していく動きとしての側面も見え隠れするの

である。

いずれにしても、清沢の大学寮時代の動向は、その後展開する改革運動の経緯を検討するうえで重要な時期であったことは間違いない。とくに、カリキュラム改編への関与や教授陣たちとの交流などは、明らかに学制改革に繋がるものがある。清沢が大学寮の科目に関する打ち合わせに際して井上と激しく討論したというように、彼らの意見交換や情報共有を促進させ、宗門学制の整備という目標が現実味を帯びてくる機会となったのである。このため、これらの動向は、改革運動の胎動期の実情を示すものとして注目してよい。²¹

のちの真宗大学時代のカリキュラムや科目担当者については、これまでもある程度知られていたと思われる。しかしその前の真宗大学寮になると、とくに誰がどの科目を担当していたかについては、ほとんど知られていなかったのではない。またこの時期は、宗門学制改革運動への胎動期として位置づけられる可能性があり、宗門学事史上、重要な時期であることも分かってきたように思う。

以上、今回の別巻編集に係わる調査によって、清沢をはじめとする各科目担当者やその動向を知ることができたので、その成果について、若干の考察も加えて紹介した次第である。(以上、大艸)

- 1 これらを調査・確認するにいたる過程で、本学図書館や大学史資料室の方々に多大なご協力を賜ったことを付記しておく。
- 2 各氏に甚深の謝意を申し上げるとともに、今後の清沢満之研究に資する目的からも、ここに文献情報を公開し、広く共有をさせていただく。
- 3 関根仁応や清沢満之は各史料上では旧姓になっているが、本論では関根、清沢に統一した。
- 4 明治二十一年二月十四日局達第一号(『本山報告』三三二号)。
- 5 『本山報告』四九号。
- 6 これを整理すると左のごとくである(及第・修了などの表記は出典に従った)。なお、岡本覚亮は明治二十五年に中島姓に改姓して

いる。

別表

年月	住田智見 岡本覚亮	上杉文秀	関根仁応	出典
明治二年（一八八八）一〇月	別科二年級及第			『本山報告』四〇号
明治三年（一八八九）七月	別科卒業	別科二年級修了	別科一年級修了	『本山報告』四九号
明治三年（一八九〇）七月	本科一年級修了	別科卒業	別科二年級修了	『本山報告』六一号
明治四年（一八九一）七月	本科二年級修了	本科一年級修了	別科卒業	『本山報告』七三号
明治五年（一八九二）七月	本科卒業	本科二年級修了	本科一年級修了	『本山報告』八五号
明治六年（一八九三）七月		本科卒業	本科二年級修了	『本山報告』九七号
明治七年（一八九四）七月			本科卒業	『本山事務報告』一〇号

- 7 科目名は、上記の科目担当者の記事と表2でのカリキュラムで表記が異なる場合があるため、表3では（ ）で異同を補った。
- 8 『本山報告』三七号。
- 9 例えば、明治二十二年二月の「大学寮規則」第三章第三款第七条に「学年ハ七月十一日ニ始リ翌年七月十日ニ終ル」とあり（『本山報告』三二号附録）、同二十三年七月の同第八条に「学年ハ九月ニ始リ翌年八月ニ終ル」（同六一号附録）とある。
- 10 『本山報告』五一号。
- 11 『大谷大学百年史』（大谷大学、二〇〇一年）、一七五頁。
- 12 明治二十九年六月五日告達甲第一号（『本山事務報告』三三三号）。
- 13 『関根仁応日誌』第八卷、一六六頁。
- 14 関根仁応と改革運動との関係については、名畑直日見「明治期の 大谷派宗門の動き―関根仁応日誌を通して―」（『教化研究』

- 一三七号、二〇〇七年）、大畑博嗣「『関根仁応日誌』に見る大谷大学史―教団改革運動から真宗大学東京移転まで―」（『真宗総合研究所研究紀要』二六号、二〇〇九年）などを参照。
- 15 注11前掲、一一二頁。
- 16 『全集』第九卷、五五頁。
- 17 西村見暁『清沢満之先生』（法蔵館、一九五一年）、一三七頁。
- 18 注17前掲、一三一頁。
- 19 森岡清美『真宗大谷派の革新運動―白川党・井上豊忠のライフストーリー―』（吉川弘文館、二〇一六年）。
- 20 注17前掲。
- 21 この時期の動向の詳細は、森岡氏の著書（注19前掲）を参照。

*本報告は二〇一八～二〇二〇年度 指定研究 清沢満之研究の研究成果である。